

牛山・おとまが淵を民俗的な視点から追う ～ 「雨乞い」の祭場ではなかったか ～

富中昭智

1 はじめに

民間の説話には語り手のメッセージが込められているという[1]。民間の説話とは、いわゆる「民話」と呼ばれるものであり、昔話・伝説・神話の類が該当する。「おとまが淵」は、春日井市の牛山地区に伝わる伝説[2]である。

「おとまが淵」の出典は、『正事記拾遺』[3]という随筆である。牛山村に伝わっていた伝承をまとめたのだろう。初めて触れる方と思われるので、少し長いが全文を掲載し、下に訳文も載せておく。



『春日井のむかし話』

春日井市



『袂草 正事記』

鶴舞図書館所蔵

- ① 牛山、正事記云、村ノ南ニ細丸川トテ流ル、是ニオトマカ淵ト云アリ、昔所ノ者水ククリシテ魚ヲ捕、
- ② 或時六月十六日ノコト成ニ、今日ハ魚一円ナクテ小キ鯰ヲ一ツ取テアカリ、川端ニ投置テ休居タル所ニ、淵ノ底ニテオトマオトマト云声スル、其時右ノ鯰子オウト答テ其ママ川ヘ飛コム、夫ヨリ此淵ヘ入者ナシ、オトマカ淵ト名付、扱又小雨ナトノ降時分ニハ、何トヤラン渡リ瀬ヘ出テ牛馬ナトヲ引込ムコトアリシト申伝フ、
- ③ 明暦二年丙申六月朔日ニ此淵ヨリ龍アカル所ニ見タル者多シ、予モ遠所ヨリ見テアリケルカ、黒雲此淵ヨリ立ノホル、其中ニ殊ニ真黒ニ長キ物サカリテ見エシ、其形丸ク見ヘテ次第ニ跡細ク立ノ音シテ東ノ方ヘ鳴テ行ク、北ヘ回りテ西ヘ行ケル由、後雨ノ降ヤウニテ取沙汰アリ、東ハ大草篠木辺ハ雨車軸ノ如ク雷夥シク鳴響テ大ナル氷降タル由、美濃国ニテモ如此ト聞ユ、小牧ハ雨不降空晴テ黒雲ノ行ヤウ能ミヘシ、此龍アカリテ後一兩年ノ中ニ此淵浅ク成ケル

訳文

- ① 正事記拾遺の牛山の項にこう書いてあります。村の南の方に細丸川という川が流れていて、ここに「おとまが淵」と呼ばれる場所がありました。昔は、この辺りの人たちがここで水にもぐって魚を捕っていました。
- ② ある年の六月十六日のことでした。この日は、魚がまったくおらず小さな鯰（なまず）一尾だけ捕らえると水から上がり、捕ってきた鯰を川端に放ったまま一服していたところ、淵の底から「オトマ・オトマ」と呼ぶ声が聞こえてきました。すると、先ほど捕らえてきた小さな鯰が「オウ」と返事をしてそのまま淵の中へドブンと飛び込んでしまいました。それ以後、この淵に入る人はいなくなり、「おとまが淵」と名付けられました。それから、小雨の降るような時には、淵の中から何者かが渡り瀬に出てきて牛や馬を淵に引き込んでしまうことがあると言い伝えられています。

③ 明暦二年六月（1656年）朔日（1日）、この淵から龍が昇って行くのを多くの人たちが見ました。黒雲が立ち上り、その黒雲の中に際立って真っ黒で長いものを私も見ました。その形は丸く見えていましたが、次第に細くなり夕立の音をたてながら東の方へ行きましたが、その後北へ回り西の方へ行ったそうです。

後になって雨の降った様子が伝えられて来ましたが、東の大草や篠木あたりでは大雨が降り雷が鳴り響き大きな氷が降ったとのこと。美濃の国でも同じような状態だったと伝えられて来ました。小牧では、黒雲の姿はなく雨は降らず空は晴れ渡っていました。龍が上がってから一、二年経つ間にこの淵は浅くなってしまいました。

2 湧き出る疑問

見ての通り、内容は一見なんともつかみどころのない不思議な話である。私はこの伝説を目にしたとき、すぐに江戸の怪談である「置行堀（おいてけ堀）」が頭に浮かび、いわゆる怪談の類として理解した。春日井にもこんな不思議な話が伝わっていたのだなと強い印象となって心の中に残ったのを覚えている。確か、この「置行堀（おいてけ堀）」は寛政年間（1789年から1801年）に創作されたと言われているようであるので、「おとまが淵」の方が100年以上古い。これはひょっとしたらこちらから伝播したものではないか、いつかそれらのことをとり上げてみたい、と思ったものである。

しかし、民俗学の本を読み進めるうちに、この伝承には意外な事実を伝えているのではないかと思うようになった。

そして、「おとまが淵」を怪異譚たらしめている、

ア.意味がはっきりしない「おとま」という言葉

イ.そう呼びかけた声の主

ウ.「オウ」と返事をする「鯰」

エ.牛や馬を淵に引き込んでしまう淵の中から出てくる「何者か」

オ.淵から昇っていく「龍」

について、私なりの見解をもつようになった。

そこで、今回の論文では「おとまが淵」伝説を民俗学的な視点から整理し、次のことを追究しようと思う。

-
- ・「声の主」「鯰」「何者か」「龍」とは何か？
 - ・「おとまが淵」伝説は何を意味しているのか？
 - ・おとまが淵はどこにあったのか？
 - ・おとまが淵の由来となった「おとま」の意味は何か？
-

幸いこの「おとまが淵」伝説は、いくつか先行研究がある。それらを紹介しながら進めていきたい。

3 先人の見解

まずは高橋敏明氏の分析[4]を紹介する。高橋氏は、この「おとまが淵」の話の構成を①②③に分け、①は発生の由来、②はその後の奇怪な出来事、③が現実の出来事、とし、①②は典型的な伝説の世界、③は史実だが架空の龍が登場することを指摘し、「竹に木を継いだ」ような違和感と評してい

るのが印象深い。

私もこれには異論がない。つまり、全体的には空想上の話、高橋氏の言葉によれば「伝説の世界」ということになる。現実の話ではないと言ってさしつかえない。しかし、興味深いのは、作者が見た事実が入っているところ(③)だ。年月日もはっきりしている。高橋氏もさすがにこれを龍とは言っていないが、異変があったことを肯定している。となると、すべてを空想上のこととは片づけられなくなる。何某かの事実が込められているととらえるべきであり、①②も何某かの伝承があったればこそ、関連付けて描かれているととらえなければならないだろう。

そして、高橋氏は、「おこまが淵」(立田村)と「牛巻の淵」(名古屋市瑞穂区堀田通)の話が「おとまが淵伝説」より古く、話が似ていることから、牛山に伝わったと推測している。

③については、高橋氏は竜巻としているが、私は少し違う見解を持っている。次の報告を見ていただきたい。

・昭和14年(1937)前田廣造氏の報告[5]。紀州伊都郡見好村では、雨乞いの最終手段として鍋尻を川または池で、洗うことが行われた。九度山町ではその理由を以下のように伝えている。雨の森と呼ばれている丹生川中流には、白い鯰が住んでいて、鍋墨を川に流すと体が汚れるためにそれを嫌い、雨を降らせてきれいに洗い流すのだといわれている。また、雨の森には龍王の小祠があるという。

・昭和34年(1959年)最上孝敬氏の報告[6]。諏訪湖の最深部、水神淵に凶暴な大鯰がいた。諏訪の土神龍電が家臣の「音坊」に命じ、鯰を捕らえさせる。主人の元へ運ぶ途中、坂で大鯰が逃げ出し、水神淵深くに沈んでしまった。以来、この坂を「鯰坂」という。

・昭和50年(1975年)林笠翁の報告[7]。豊前国千丈ガ滝の山に観音堂があり、その堂前に池がある。その上の橋の上で涼んでいると、水中から鯰(なまず)が躍り上がり、廻りながら水を1尺ほど離れると、直ちに空へ昇っていった。するとたちまち雨が降った。これは竜に違いないと、目撃した2人は語った。〈()は富中〉

・昭和55年(1980)井田安雄の報告[8]。群馬県の上大島の清水の三歳(サンゼエ)ナマズを取ったら、山から「オトボウヤ、オトボウヤ」と声が出て、腰籠のナマズが「オオイ」と返事したので、怖くなってナマズを置いて逃げ帰った。大きいナマズが小さく化けていた。

・平成9年(1997)中央大学民俗研究会の報告[9]。青森県の車力の池で小さい子供が溺れるのは河童の仕業、または沼の主の仕業。沼の主とは巨大な鯉や鯰。

これら民俗学の報告によれば、鯰(鯢)は「池の主」「河童」「龍」と関係があることがわかる。特筆すべきは、「声」を出したり「返事」をしたりするところだ。これらは「おとまが淵」の話と共通している。おとまが淵の中から呼びかけているのは「池の主」であり、「河童」ではないか。「小さな鯰」も河童が変化したものにとらえることができる。③については高橋氏の言う通り竜巻というよりも、むしろ、夕立(今でいうゲリラ豪雨)を降らせた雲ではないかと思う。

4 「雨乞い」の儀式を匂わせる数々の表現

ところが、最近、『殺牛・殺馬の民俗学』[10]を読み、この「おとまが淵」に対する考えが変わった。これは創作物ではなく、かつて行われていた民俗的な儀式を伝えたものではなかったか、と。

私は、「おとまが淵」の話のなかに出てくる次の文言に注目した。

小雨ナトノ降時分ニハ、何トヤラン渡リ瀬へ出テ牛馬ナトヲ
引込ムコトアリシト 申伝フ

小雨の降るような時には、淵の中から何者かが渡り瀬に出てきて牛や馬を淵に引き込んでしまうことがあると言い伝えられています。

これは、かつて「雨乞い」の儀式として、牛馬が生贄にされたことを暗喩しているのではないか。牛馬が淵に引き込まれることと小雨が関連づけられているからだ。

しかも、「おとまが淵」の話のなかには、次のような一節もある。

明暦二年丙申六月朔日ニ此淵ヨリ龍アカル所ニ見タル者多シ、予モ遠所ヨリ見テアリケルカ、黒雲此淵ヨリ立ノホル（略）東ハ大草篠木辺ハ雨車軸ノ如ク雷夥シク鳴響テ大ナル氷降タル由

明暦二年六月朔日、多くの人たちがこの淵から龍が昇って行くのを見ました。（略）黒雲が立ち上り、その黒雲の中に際立って真っ黒で長いものを私も見ました。（略）東の大草や篠木あたりでは大雨が降り雷が鳴り響き大きな氷が降ったとのこと。

これは、これは大きな積乱雲か、あるいは竜巻と思われ、いわゆる夕立となり、雷が鳴り、氷（ひょう）も降ったとある。『殺牛・殺馬の民俗学』によると、「雨乞い」は「水神」を怒らせて雨を降らせる儀式であり、怒らせるために、清らかな場所を牛や馬の血で穢すことがされたという。これは『殺牛・殺馬の民俗学』だけでなく、柳田國男[11]も指摘していることである。そして、6月1日という「新月の日」というのも、宗教的（靈的）な雰囲気漂わせている。

つまり、かつて「雨乞い」の儀式が行われ、その御利益があって雨（夕立・竜巻）が降った。「おとまが淵」はその祭場だったことが考えられるのである。

5 雨乞いの祭場だった手がかり

では、この「おとまが淵」が祭場だったという痕跡は何かあるだろうか？ それは、この「おとまが淵」がどこにあったかが重要な鍵となる。河村広康氏や長谷川碩氏、高橋敏明氏など、牛山地区や春日井の歴史を探究された先学がこのことについてとり上げてきている。

そこで、彼らの主張を整理してみる。

『春日井のむかし話』は、おとまが淵の位置を西行堂川と書いている。牛山の村の南ということに重点を置いたようで、現在の「西行堂川」と考えたようだ。高橋氏も比定を試みている[4]が、『むか



『殺牛・殺馬の民俗学』
筒井功、河出書房新社

し話』を下敷きにしているようで、「おとまが淵」は「西行堂川」としている。その根拠として「どんど(淵)橋」と「村の南は卑湿の地」を上げている。しかし、これらがなぜ根拠となるかの説明はない。

牛山の住人である長谷川碩(はじめ)氏が自身のHP「Hiro's Homepage<牛山風土記>」[12]のなかで、先達の河村広康氏が書いた「よもやま話」(牛山の歴史などを描いた小冊子)[13]を紹介している。河村氏は、この小冊子のなかで地域の伝承としておとまが淵の位置を比定しているのだ。その位置は牛山橋(牛山小学校の少し北)のすぐ西、現在の「柳坪」の集落のあたりとしている。細丸川がそこから流れ出していると書いており、現在の「牛山川」がそれに該当するようだ。この牛山川は、今では小さな用水路のようになっていて、牛山村の中心部のすぐ南を通っており、牛山小学校の北西辺りに来てそこから南下し、現在の大山川に流入している。

河村氏は伝承を元にしていないことを匂わせており、地元の方だからわかる土地勘もあることから、こちらに利がありそうだ。しかし、こちらを決め手となる根拠を示しているわけではない。このままでは、水掛け論で終わってしまう。

6 牛山地区にも水神がある

そこで、これら候補の近くに宗教的な痕跡がないか確認してみる。もしあれば、上記の「雨乞い」をしたのではないかという推測を補強する根拠となるだろう。

西行堂川説の方のどんど淵橋よりも少し南に行ったところに、稲荷社(そばの橋が「天王橋」あることから、かつては天王社と考えられる[14])がある。稲荷社は、いまでこそ商売繁盛の神のように考えられているが、かつては農耕神だった。そう考えると「雨乞い」に関係がないとは言えない。しかし、これまで「雨乞い」と稲荷社との直接の関係を指摘する研究は見当たらない。天王社もそうだ。

そして、細丸川(現在の牛山川)説の方の牛山橋付近にも、それらしいものは見当たらない。関係ありそうなものとして、江戸期の村絵地図には愛宕社があることがわかった。しかし、この愛宕社も「雨乞い」とは結びつかないだろう。

ここで頓挫するかと思ったが、実は、少し北ではあるが、梅林地区(牛山村)に「水神」の石祠があることがわかっている[15]。「水神」は、『殺牛・殺馬の民俗学』にもあるように、まさに「雨乞い」と直結する神様だ。「おとまが淵」は、かつてこの水神の傍にあったのではないだろうか。

7 「おとま」とは何か？

最後に「おとまが淵」の意味を考えたい。この話を見たとき、「音が禍々(まがまが)しい」という意味ではないかと感じた。「オトマ、オトマ」「オウ」という音の響きから、当たらずとも遠からずではないかと思っていた。

しかし、何回もこの話を読んでいるうちに、この不思議な声は「オトマ」と言っているのであり、「おとまが淵」は「おとま」+「が淵」であることに気がついた。これが正しいとなると、「が淵」は、「~の淵」という意味になるので、「おとま」が1つの言葉ということになる。

では、この「おとま」とは何か。「お+とま」や「おと+ま」も考えたが、どうしても意味をなさない。そこで『殺牛・殺馬の民俗学』の方も何回も読み直し、ヒントを探してみた。なかなか思いつかなかったのだが、時間をおいていたところ、「ま」とは「馬」のことではないかと考えるようになった。そして、雨乞いが淵を穢すために馬を落とすことから、「おと」は「落と(す)」のことであ

り、「おとま」とは「馬を落とす」という意味だったのではないかと。つまり、「落馬（おとま）が淵」である。

8 おわりに

春日井の北側、いわゆる広い意味での春日井原は、水に苦勞してきた土地である。庄内川という大河川があるものの、その流路の位置は低く、その北側にある春日井は水を利用しにくかった。気象的にも太平洋側の気候と内陸性の気候の境目に位置し、比較的雨が少ない地域でもある。そのため、昔からため池がたくさんつくられ、江戸期に灌漑用水が引かれた。

そのなかで牛山地区は西行堂川と大山川という比較的水量の多い河川に恵まれた地域である。そのため古代から人が住み始めた痕跡があり、「おとまが淵」はその古い時代の人々の民俗的な儀式を伝えた痕跡だったのではないかと考えたのである。それが長い間に変化して怪異譚として伝わってしまい、その本質がよくわからなくなってしまうのではないかと。これは文面だけ追ってもその解析には限界がある。民俗的な視点の導入の必要性を感じたところで、『殺牛・殺馬の民俗学』との出会いがあったわけである。1つの問題提起として上梓しておきたい。

令和7年（2025年）3月27日

<参考文献>

[1] <昔話は「人々の心や暮らしを写し出す遺伝子」時代と人の心を反映する昔話の魅力を大阪樟蔭女子大学の黒川麻実先生に聞く>HP『ほとんど0円大学』2023年5月16日に掲載されているインタビュー記事。黒川麻実氏は2024年より愛知県立大学教育福祉学部教育発達学科准教授。

[2] 『春日井のむかし話 下』平成26年、発行：春日井市、文：春日井郷土史研究会

[3] 『正事記拾遺』津田藤兵衛（房勝）、刊行年は不詳

津田房勝（1629～1701）は、尾張初代藩主義直の最晩年の頃の側室貞松院の御賄頭。

私が「おとまが淵」伝説を知ったのは、HP「Hiro's Homepage」のなかの<牛山風土記>が最初だった。管理者は長谷川碩氏。地元牛山の方である。彼は、このなかで『正事記拾遺』は現在存在しないが、『尾張徇行記』（霊元11年）に紹介されていること記している。霊元11年は1671年であることから、『正事記拾遺』はこれより前に書かれたのだろう。

しかし、私が改めて調べてみたところ、『名古屋叢書正編 第23巻 随筆編(6)』に「袂草 正事記」として納められていることがわかった。ここは、『名古屋叢書』に納められている「おとまが淵」を載せておく。

[4] 「春日井の伝説を探る1」高橋敏明 『春日井郷土史 第4号』2018年、春日井郷土史研究会

[5] 「水霊のこと」前田廣造 『民間伝承4巻6号』昭和14年（1939）3月1日 民間伝承の会

[6] 「オトボウ淵」最上孝敬 『西郊民族通巻8号』昭和34年（1959）1月17日 西郊民俗談話会

[7] 「仙台問題」林笠翁 『日本随筆大成第1期』昭和50年（1975）3月10日 吉川弘文館

[8] 「群馬の伝説の代表例」 『群馬県史資料編27 民俗3』昭和55年（1980）3月31日 群馬県

[9] 「青森県西津軽郡車力村 調査報告書」 『常民34号』平成9年（1997）12月10日 中央大学民俗研究会

[10] 『殺牛・殺馬の民俗学 いけにえと被差別』2015年、筒井功、河出書房新社

[11] 「河童駒引」『山島民譚集(一)』<柳田國男全集 第二巻>1977年、柳田國男、筑摩書房

柳田國男は、馬を水に引き込むという伝承から、馬を水神に捧げていた儀礼の名残とする説を唱えた。『常陸国風土記』から、古来、日本では、雨乞いなどを祈願するときに「生馬」を献上する風習があったことがうかがわれる、とした。

[12] 「伝説 おとまが渚」HP「Hiro's Homepage <牛山風土記>」1998年、Update 2018年、長谷川碩

[13] 「よもやま話」（河村広康）のなかに、細丸川がどこにあったのかについて書かれているという紹介が、[12]に書かれている。

[14] 「牛山町の新田地区にある天王橋を追って」富中昭智 『春日井郷土史 第8号』2023年、春日井郷土史研究会

[15] 「牛山町梅林にある水神の石祠を追って」富中昭智 『春日井郷土史 第8号』2023年、春日井郷土史研究会